

群読を取り入れた古典の授業

群読に適した古典教材

中学2年生の教科書には、古典教材として『平家物語』『枕草子』『徒然草』『漢詩』があります。これらの教材が、朗読や群読に適しているかどうかを判断しなければなりません。群読に適する条件として以下のことが挙げられます。

- 文体に、音声化するに適したリズムやうねりのあるもの
- 複数の人物が登場するもの
- 作品の語り手の視点が移り動くもの
- 内容が思想的であるよりは抒情的であるもの、さらには叙事的であるもの
- 表現が説明的であるよりは描写的であるもの

これらの条件の多くを備えているものとしては、まず『平家物語』が考えられます。口承文芸としての特質を理解する上でも音声化が必要な作品です。次に適しているのが『枕草子』です。随筆である『徒然草』は、群読よりも朗読に適しています。そして「漢詩」は、その独特のリズムから朗読、群読のどちらにも適していると思われます。

また、一般的に群読に適しているものとして「詩」が挙げられます。中学2年生では、吉野弘の『夕焼け』という作品があります。これを発展的な教材として扱うことにします。

段階を踏んだ指導計画

群読は個による朗読を基盤としています。ほとんどの生徒が群読をやった経験がないという実態から、いきなり群読に入るのではなく、まずは、個人の朗読から入ることにします。ここでは、『徒然草』を教材として扱います。

次に、群読の導入として、『枕草子』「春はあけぼの」を使い、グループ群読を行います。そして、技能面、意欲面ともに高まってきたところで、群読に最も適している『平家物語』「扇の的」をもってくることにします。単元における学習のピークを、「扇の的」の群読にもってこようと考えました。

さらには、生徒の選択により、「漢詩」を朗読あるいは群読させます。最後には、学習のまとめとして『夕焼け』を使い、もう一度グループ群読を行うことで生徒の変容を見ることにします。

どんな指導法でもそうですが、ねらいと生徒の実態と教材を考慮しなければなりません。まずは群読ありきではありません。群読をやってみましたではいけません。生徒にこんな力をつけさせたい、生徒にこうなってほしいという願いがスタートです。そして、生徒の実態を踏まえ、教材を分析します。朗読がいいのか群読がいいのかを判断します。あるいは、どちらにも適さないこともあり得ます。

この教材は、こんな特徴があつて、生徒にこんな力をつけたい、だから群読を取り入れる。このことが明確でないままに実践を進めても、思うような成果は得られません。ねらいと実態あつての指導法です。群読は、その選択肢の一つでしかありません。